

## 岐阜県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

	農指第1140号
	平成11年11月16日
一部改正	農指第109号
	平成12年4月7日
一部改正	農技第788号
	平成18年11月24日
一部改正	農技第1130号
	平成19年3月19日
一部改正	農技第1251号
	平成20年2月28日
一部改正	農技第1320号
	平成21年3月19日
一部改正	農技第20号
	平成22年4月1日
一部改正	農技第1135号
	平成23年3月7日

### 1 趣旨

持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（平成11年法律第110号。以下「法」という。）第3条第1項に基づき、本県における持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針を（以下「導入指針」という。）を定める。

本指針は、農業者が目標とすべき具体的な生産方式を明らかにするものであり、農業者が本法に基づく支援措置の対象となるために必要な導入計画の作成及びその認定の前提になるものである。

### 2 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

有機物等を有効に活用した土づくり並びに環境への負荷の大きい化学肥料、化学農薬等生産資材の効率的な使用と削減を基本として、生産性と調和できる、幅広く実践可能な、環境にやさしい農業の導入を図る。

#### (1) 共通項目

有機質資材の施用による土づくり、化学肥料低減技術、化学農薬低減技術の全てを用いて行われるものを「持続性の高い農業生産方式」とする。「持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画」（以下「導入計画」という。）の認定を受けるためには、(2)以下に掲げる各作物ごとの「たい肥等施用技術」、「化学肥料低減技術」、「化学農薬低減技術」の区分ごとに一つ以上を用いることが必要である。

#### ア たい肥等施用技術

堆きゅう肥等の有機物や土づくり資材を適正に施用し、土壌の物理性\*、化学性\*、生物性\*を改善するとともに、有効土層を拡大するための深耕、土壌診断に基づく土壌・肥培管理、さらには田畑輪換等合理的な作付け体系の導入に努め、地力を増進する。

#### イ 化学肥料低減技術

土壌診断及び作物栄養診断に基づく施肥改善や、有機質肥料・緩効性肥料等の環境にやさしい肥料や局所施肥等の環境にやさしい施肥法を導入する。

#### ウ 化学農薬低減技術

防除では、温湯種子消毒、機械や動物利用による除草、土壌の線虫を駆除する植物栽培、抵抗性品種・台木の導入、土壌還元消毒、熱を利用した土壌消毒、被覆資材の利用等の耕

種の防除をはじめ、性フェロモン、生物農薬、光を利用した防除等の新技術を導入する。

＊・土壌の物理性

作土の厚さ、有効土層、3相分布、土壌の硬さ、仮比重、粗孔隙、易有効水分保持機能、透水性、地下水位等をいう。

・土壌の化学性

土壌pH、電気伝導度（EC）、陽イオン交換容量（CEC）、交換性塩基含量とそのバランス、可給態リン酸、可給態ケイ酸、腐食、可給態窒素、硝酸態窒素、アンモニア態窒素等をいう。

・土壌の生物性

土壌微生物（細菌、放線菌、糸状菌）の生息状態等をいう。

（2）作物別項目

【穀類】

ア 水稻

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	稲わら 500kg/10a モミガラ 100kg/10a 堆きゅう肥 表1参照 レンゲ等 1.5～2t/10a
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	温湯種子消毒技術 機械除草技術 除草用動物利用技術 マルチ栽培技術 抵抗性品種栽培・台木利用技術 生物農薬利用技術	

表1 水稻における堆きゅう肥施用

種 類		牛		豚		鶏
処 理 形 態		きゅう肥	オガクズ堆肥	きゅう肥	オガクズ堆肥	オガクズ堆肥
使用量 (t/10a)	湿 田	1.0	0.5	0.5	0.5	0.3
	乾 田	2.0	1.5	1.0	1.0	0.5
	漏水田	2.5	2.0	1.5	1.5	1.0
	黒ボク田	1.5	1.0	1.0	0.5	0.3

イ 麦類 小麦、大麦 など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術	稲わら 500kg/10a 牛・豚堆きゅう肥 1t/10a
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術	

ウ 雑穀類 えごま、そば など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	表 1 参照
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 光利用技術 フェロモン剤利用技術 被覆栽培技術 マルチ栽培技術	

【豆類】

ア 大豆、小豆 など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	稲わら 500kg/10a 牛・豚堆きゅう肥 1 ~ 2t/10a
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 生物農薬利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

【野菜】

ア 果菜類 トマト・ミニトマト、きゅうり、なす、イチゴ、メロン、甘長ピーマン、スイートコーン、えだまめ、グリーンピース、あきしまささげ、十六ささげ など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物使用技術	表 2 参照
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	温湯種子消毒技術 機械除草技術 生物農薬利用技術 対抗性植物利用技術 抵抗性品種栽培・台木利用技術 土壌還元消毒技術 熱利用土壌消毒技術 光利用技術 フェロモン剤利用技術 被覆栽培技術 マルチ栽培技術	

イ 葉茎菜類 はくさい、ほうれんそう、キャベツ、ねぎ、しゅんぎく、こまつな、チンゲンサイ、レタス、みずな、ブロッコリー、アスパラガス など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物使用技術	表2参照
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	温湯種子消毒技術 機械除草技術 生物農薬利用技術 対抗性植物利用技術 抵抗性品種栽培・台木利用技術 土壌還元消毒技術 熱利用土壌消毒技術 光利用技術 フェロモン剤利用技術 被覆栽培技術 マルチ栽培技術	

ウ 根菜類 だいこん、にんじん、かぶ、さといも、たまねぎ、じゃがいも など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物使用技術	表2参照
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	温湯種子消毒技術 機械除草技術 生物農薬利用技術 対抗性植物利用技術 抵抗性品種栽培・台木利用技術 土壌還元消毒技術 熱利用土壌消毒技術 光利用技術 フェロモン剤利用技術 被覆栽培技術 マルチ栽培技術	

表2 連用を前提とした野菜に対する堆きゅう肥用の目安

種 類	処 理 形 態	牛		豚		鶏
		きゅう肥	オガクズ堆肥	きゅう肥	オガクズ堆肥	オガクズ堆肥
使用量 (t/10a)	少肥型	2.0	1.0	1.0	1.0	0.4
	中肥型	3.0	1.3	1.3	1.2	0.6
	多肥型	4.0	2.0	2.0	1.7	1.0

少肥型：窒素、加里基準量 20kg/10a 以下      だいこん、さといも、ほうれんそう等  
 中肥型：窒素、加里基準量 25kg/10a 前後      キャベツ、トマト等  
 多肥型：窒素、加里基準量 30kg～35kg/10a      なす、きゅうり等

【果樹】

ア かき

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 4t/10a まで 豚糞堆肥 2t/10a まで
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

イ なし

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 4t/10a まで 豚糞堆肥 2t/10a まで
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

ウ もも

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 3t/10a まで
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

エ りんご

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 3t/10a まで

化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

オ かんきつ類 みかん、ゆず など

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 3t/10a まで
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

カ ブルーベリー

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	ピートモスなど
化学肥料低減技術	肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術 光利用技術 フェロモン剤利用技術 被覆栽培技術 マルチ栽培技術	

キ その他 栗、ぶどう、うめ、キウイフルーツ、いちじく、パッションフルーツ など

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 2t/10a まで
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 除草用動物利用技術 生物農薬利用技術	

	被覆栽培技術 光利用技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	
--	------------------------------------------	--

【特用作物】

ア 茶

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術	牛糞堆肥 3t/10a 豚糞堆肥 1.5t/10a
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

イ その他 こんにゃく など

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	牛糞堆肥 2t/10a
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	
化学農薬低減技術	機械除草技術 生物農薬利用技術 光利用技術 被覆栽培技術 フェロモン剤利用技術 マルチ栽培技術	

(注) 堆きゅう肥の施用にあたっては、未熟なものの施用は避けるとともに、肥効率を考慮して基肥を減肥する。

3 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

(1) 堆きゅう肥等の有機質資材の適切な施用を行うためには、作物、導入する技術等に対応した土壌診断が不可欠である。このため、持続性の高い農業生産方式の導入にあたっては、必要に応じて普及指導員や農業団体等の指導・助言を受けることが望ましい。

(2) 化学肥料使用量を低減するためには、有機質肥料の施用等に加え、生育診断に基づいた効率的施肥を行うことが重要である。このため、持続性の高い農業生産方式の導入にあたっては、必要に応じて普及指導員や農業団体等の指導・助言を受けることが望ましい。

(3) 化学農薬使用量を低減するためには、代替技術の導入に加え、発生予察情報に基づく、効率的な防除が重要である。このため、持続性の高い農業生産方式の導入にあたっては、病虫害防除所の病虫害発生予察情報等の活用を図ることが望ましい。

#### 4 その他の事項

県は、化学肥料・化学農薬の削減に努める農業者の取り組みを広く消費者に情報提供するため「ぎふクリーン農業表示制度」を導入している。このため、持続性の高い農業生産方式の導入計画が認定された農業者においては、本制度を積極的に活用する。